

善悪を見分ける力

松本敏之 (日本キリスト教団鹿児島加治屋町教会牧師)

映画「ハンナ・アーレント」を、DVDで観ました(2012年、ドイツ他。〈監督〉マルガレーテ・フォン・トロッタ)。これは、20世紀のユダヤ人女性哲学者ハンナ・アーレントについてわかりやすく紹介してくれる貴重な映画です。

話は1960年初頭、何百万人ものユダヤ人を収容所へ移送したナチス戦犯アイヒマンが、逃亡先のアルゼンチンで突然拉致される場面から始まります。アイヒマンはイスラエルへ移送され、そこで歴史的裁判が行われることとなり、それを知ったハンナ・アーレントは、「ザ・ニュー Yorker」誌に取材を申し出、その裁判を傍聴します。しかし裁判が終わっても、なかなか彼女のレポートは発表されません。彼女はアイヒマンが極悪人ではなく、全くの凡人であることに衝撃を受け、その存在とあの残虐行為の関係を熟考し続けていたのでした。そして彼女がようやく発表したレポートは世界を驚かせます。それは「悪の凡庸さ(陳腐さ)」という言葉に集約されるものでした。ユダヤ人の一部も犯罪に加担していたという報告も、ユダヤ人社会を怒らせることになりました。批判が渦巻く中、彼女が大学の講義の中で反論をする最後の場面は圧巻です。

「世界最大の悪はごく平凡な人間が行う悪です。そんな人には動機もなく、信念も邪心も悪魔的な意図もない。人間であることを拒否した者なのです。この現象を私は『悪の凡庸さ』と名付けました。」「人間であることを拒否したアイヒマンは、人間の大切な質を放棄しました。それは思考する能力です。」「思考ができなくなると、平凡な人間が残虐行為に走るのです。『思考の嵐』がもたらすのは、知識ではありません。善悪を区別する能力なのであり、美醜を見分ける力です。私が望むのは、考えることで人間が強くなることです。危機的状況にあっても、考えることで破滅に至らぬよう。ありがとう」私はこの映画を観ながら、自分が行っていること、行わないことが何をもたらすことになるのかに気づき、善悪を見分ける力を養われなければならないと思いました。

かつてイエス・キリストも、その感覚を失った人々を批判されました。
「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。」

薄荷、いのんど、茴香の十分の一は献げるが、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしているからだ。これこそ行うべきことである」(マタイ 23・23)。

確かに十分の一を主に献げるという律法はありましたが(レビ記 27・30)、ここに出てくるような香辛料に関してはどちらでもよいとされていました。しかし宗教熱心な人々は、こうした細かいものまで徹底して十分の一を献げていました。その一方で、神が本当に喜ばれるものが何であるのか、それは正義、慈悲、誠実であるということに気づいていなかったのです(ミカ書 6・8 参照)。ここでもある種の思考停止が起こっていたと言えるでしょう。

そのような人間が指導的立場に立つとき、それがとんでもない破滅をもたらしていても、気づかないことがあります。「自分は自分の務めを果たしているだけだ」ということで自分を正当化し、その責任を負おうとしないのです。原発再稼働の問題にしても、再軍備化の問題にしても、そうではないでしょうか。しかし民主主義である現代においては、それは政治家だけではなく、私たち民衆の責任でもあるでしょう。今日の平和は、思考停止した人間によってこそ、危機に瀕しているのではないのでしょうか。